



樋口月香  
vs  
イケメンくん

試読版

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

みぞほねのサークル



表紙イラスト・塞翁が牛  
本文・みぞほね

あなたに与えられた控室は、必要最低限と呼ぶには、いくぶん質素すぎるものだった。

某日。某TV局。某スタジオ。

283プロのプロデューサーであるあなたは、スタッフではなく演者として、この場所を訪れていた。

与えられた控室は6畳ほどの元物置で、備品といえば机に椅子、小さな姿見。そして生放送の様子を映す小さなモニタ。それだけだ。演者に与えるものとしては、相当に酷い。

しかし、あなたは気にもとめなかった。

なぜならあなたは――

**『にやっ……にやあああ〜〜んっ♡♪  
にゃんにゃんっ、にやうう〜っんっ♡  
まどニヤンの顔踏んづけてくれてっ、  
ありがとうだにや〜っ☆ イケメンの  
○○クンに顔踏んづけてもらえてっ、**



# まどニャンっ、とおお～っても嬉しい にゃ～んっ♡♪』

モニタに映る恋人の痴態に——アイドル樋口円香が崩壊していくさまに、釘付けになっているからだ。

放送中の現場は、落ち着いた雰囲気のリビングルームだった。薄灰色のタイルカーペットに、キングサイズのベッドがひとつ。俗に言ってしまうとラブホテルのような部屋だ。

映っているのは全裸の少女と、着衣の少年である。

少女の方は、画角の関係で顔が見えない。だが、あなたは彼女を見知っている。

小柄で細い少女だった。だが、まとう雰囲気はその細さに反して、ひどく艶めかしい。すらりと伸びた手脚にはシミひとつなく、引き締まりながらも確かに乗った脂が、たまらなく魅力

的だった。

そう、顔を見なくてもわかる。

彼女は283プロ所属、ノクチルの樋口円香  
——あなたの恋人だ。

『にゃんっ♡ にゃうんっ♡ うにゃあんっ♡  
にゃんにゃんっ♡ にゃあ~~~~んっ……♡』

その円香が。

あなたの恋人が。

素っ裸になって、ベッド脇に寝転がっていた。

両手を胸のあたりで丸め、両脚をはしたなく開き、ニャンニャンと猫の鳴き真似を繰り返している。普段の円香を知る者なら、彼女の発狂を疑うほどの醜態だが——悪いことに、円香は正気だ。

円香は自分の意思で媚びている。

その証拠に、柔らかな両腿の間から愛液が床に垂れ落ち、上気した肌は汗で艶めかしくギラ

ついていた。

『〇〇クン見てにゃんっ♥ まどニャン媚びて  
るにゃっ♥♥ にゃ〜んにゃんっ♥♥ にゃん  
にゃ〜んっ♥★ お顔踏まれながら一生懸命媚  
びてるにゃんっ♥♪ にゃう〜〜んっ★』

画角に映るもうひとつの影——容姿端麗な少年は、着衣でベッドに腰掛けたまま、円香の媚びを受け流していた。円香よりも、ふたまわりは小柄である。まだ幼いのだ。

少年は幼さに相応の小さな足で、円香の顔を容赦なく踏みつけていた。

顔は人格の象徴とも呼べるものである。それを踏みつけられるということは、人としての尊厳を踏みにじられるに等しい。

にもかかわらず、円香は怒ろうともしない。

いやそれどころか、口の端を卑しくつり上げ、涎まで垂らしている。

少年はぷっと噴き出して、円香の目元をぐり

ぐりと踏みにじった。

『ニヤけ面ひっど〜……(笑) 円香さん、最初はクールぶってカッコつけてたのに、なっさけねえなあ……。そんなにセックスしたいの?』

『はいっ!!♥ したいっ♥ したいですっ!!♥♥  
……あっ、しっ、したいにゃあ〜っ♪ ○○  
クンとセックスさせてほしいにゃ〜っ!!♥』

『ぶはっ……っ……! そっ……そっか〜♥  
じゃ、もっと必死で媚びないとっすね〜(笑)』

『はいっ!!♥ にゃんッ、にゃうッ、にゃんッ♥  
セックスっ!!♥ セックスさせてにゃ〜っ!!♥♥  
○○クンとセックスっ♥ セックスしたいにゃ  
〜んっ♥♪』

あなたと居るときには一度も見せたことのない朗らかな笑顔を浮かべ、馬鹿丸出しの媚びを演じる円香の姿に、嗚咽が溢れそうになる。

これは生放送だ。

円香は自身の媚態が全国放送されていることを知っている。それでも無様なニャン媚びを止めようとはしない。

アイドル樋口円香は、もう終わっている。

『〇〇クンもっと顔踏んでにゃっ♡ 踏んでほしいにゃんっ!!♡♪』

『それ媚びになってなくな〜い？ ま、いいや。よい……しょ！』

『ふぎゅウッ!!★♡ えへっ、えへへっ♡♪  
〇〇クンの足い〜っ……♡』

円香の間抜けな嬌声を聞きながら、あなたは頭を抱えた。テーブルにぽたぽたと涙が落ちる。

ああ、どうしてこんなことになってしまったのか。

時間よ、どうか巻き戻ってくれ。

巻き戻ってくれれば、たとえ円香と別れるこ

とになっても、こんな番組に出演させたりはしないのに——





## **N T R 耐久エロバラエティ♥【生放送 S P】 ～イケメンとお部屋で2人っきり!? ガチ惚れしなきゃ勝ち♥～**

最低の番組だ。

あなたも、この生放送のことは以前から知っていた。

知ってはいたが、まさか自分が出演させられる側になるとは思ってみなかった。

恋愛に関するアイドル業界の意識は、以前とはずいぶん様変わりしている。

かつて常識だった「アイドル＝恋愛禁止」という命題は、もはや常識とは呼べなくなった。今日ではアイドルと一般人の恋愛は言わずもがな、アイドルと芸能人が熱愛をオープンにすることも珍しくはない。そして、そのほとんどは祝福とともに受け入れられるのだ。

しかし、例外もある。

アイドルとプロデューサーの恋愛である。

マネジメント側との恋愛——それはファンにとって最悪の裏切りに他ならない。ファンが座席やチケットに一喜一憂する間、それを用意する側が「裏でハメまくってましたあ〜♥(笑)」とバラすのだから、怒りを買うのは当然と言える。

許されるには、それに見合うカップルであると証明しなくてはならない。

そのための禊が、この悪趣味な生放送企画なのだ。

企画の内容は、超ショートスパンの成人向け恋愛リアリティショーと言っていい内容である。

女性アイドルがイケメン——番組が用意した容姿端麗な男に口説かれ、アイドルがなびかなければ勝ち。相手についての情報は、スタジオで対面するまで一切与えられない。

口説きは1時間。

キスあり、愛撫あり、本番あり――

個室への連れ込みあり。

ただし、すべて円香の合意がいる。

あなたの出番は、口説きが終わったあとだ。  
そこで円香と再開し、円香に捨てられるかどうかが決まる。

本番直前の控え室。

不安げに身体を揺するあなたに、円香はスマートフォンをいじりながら、目も向けずに言った。

「心配しすぎ。やめてくれます？　気が滅入るので」

心配するなど言っても、恋人がイケメンと公認されるほどの男に口説かれるのだ。しない方がおかしい。

円香は気にしないのだろうか。

自身が口説かれることへの恐れは——その姿を恋人に見られることへの恐れはないのだろうか。

あなたがそれを口にすると、円香は皮肉っぽい微笑を浮かべた。

「私があなたの視線を意識するのでは、と？それはまた——知り合ってしばらく経ちますが、それほど自信家とは知りませんでした」

いや、しかし——

あなたが言い訳しようとする、円香は「黙って」とそれを封じた。

「あなたに心配されること自体が不快です」

出会ったばかりの頃を思わせる、ぴしゃりとした口調だった。

怒気に押され、あなたは押し黙る。

すると円香は、3度ほどあなたの顔を横目で

眺め、ためらいの混じる声で付け加えた。

「だから——……心配しないで」

円香の言葉には、いたわるような響きが滲んでいた。

言った本人も思いがけなかったのだろう。

円香はごまかすように渋面をつくり、顔をそむけた。

「忘れてください」

そして——その渋面を見てはじめて、あなたは安心を覚えたのだった。



本番が始まると、バラエティ用のスタジオが一層ギラついて見えた。控え室のモニタ越しでも、その俗悪な明るさはすこしの衰えも感じさせない。

アイドル業界に身を置くあなたであっても、こうした毒気には、ときおり不気味なものを感じてしまう。業界歴の浅い円香は尚更だろう。

しかし、円香はそれでも、いつもの涼しげな微笑を浮かべてた。司会の質問にもまったく慌てることなく、応答を繰り返している。

——円香ちゃんの好きなタレントは？

『いません』

——円香ちゃんの初恋は？

『忘れました』



——彼と付き合ったきっかけは？

『答えたくありません』

——彼のどんなところが好き？

『ノーコメントで』

——自分は惚れっぽい方だと思う？

『どうでしょう』

円香の余裕たっぷりの受け答えに、あなたは不安だったことも忘れ、苦笑いを漏らした。

人に嫌われることを厭わない——というより、「自身のために厭うべきではない」と信じている態度だ。つまり、いつもの円香だった。

やっぱり円香は大丈夫。

円香ならどんな男が来ても心配ない。

簡単になびいたりしない。

すぐ、俺の元に帰って——

——好きな中＊生インフルエンサーは？

『——え？』

え？

円香がぽかんと口を開ける。

司会が投げかけた、妙に具体的な質問。それに虚を突かれたというように、呆然としていた。

——円香ちゃん？ 円香ちゃんの好きな中＊生インフルエンサーは？ 教えてください。

『あ……っ——い、いません。興味ないので』

取りつくろったことは誰にでもわかる。

しかし、司会はうんうんと満足げにうなずくと、それ以上は深掘りしない。場を進めていく。

その間も、円香は動揺した顔で目を泳がせていた。

まるで、特別なゲストでも探すように。

あなたの心臓が不愉快に跳ねた。

なんだ。

なにかが——あなたもよく知らない円香のなにかが、番組側に握られている。

その答えはすぐに明らかになった。

『こんちは〜っす♥ 円香ちゃんが興味ゼロの中＊生インフルエンサー、〇〇で一すっ♥』

軽薄な声とともにスタジオ入りしてきたのは、あなたも知っている有名な男だった。いや、男というより少年と言うべきか。

幼かった。

中＊2年生のあさひよりも、まだ年下である。相応に背も低い。円香よりふたまわりは小さいだろう。

だがしかし、そういう年齢でありながら、「イケメン」と語に説得力が出るほど、容姿が整っている。芽生え始めた雄らしい荒さが、少年らしい甘い顔つきに、ある種の女にとって理想と言えるバランスで調和していた。身体つきも嘘のように細く、それでいて均整がとれている。

自信ある振る舞いも、その魅力に拍車をかけていた。自身が女性を「選ぶ側」であることを、この歳にしてすでに理解しているのだ。

——今回円香ちゃんが対決するのはこちら！

中高生からカリスマ的な支持を集める、現役  
中＊生インフルエンサーの○○くんです！

『ども～っす。円香さん、よろしくでーす』

『え、あっ、あ……………えっ……………？』

円香が目を白黒させる。

そう、プロデューサーとして芸能界に携わるあなたはもちろん、円香とて知らないはずがない。

現役中＊生の超大物インフルエンサーにして、ショート動画配信者。

小＊生の頃、恋愛リアリティショーへの出演をきっかけに注目を集め、中＊生になってからは、顔の良さとトークの巧みさでのしあがった。ショート動画を投稿すれば瞬く間に数百万PVを記録し、企業からの案件も絶えない。いやそもそも、動画の広告収入だけでも、283の年商を遙かにしのぐ。最近では自己資金でファッションブランドを立ち上げようという話すら持ち上がっている。

中高生の間で彼を知らない者はいない。

まさにカリスマ——彼に比べれば、「最近売れてきた」という程度の円香など、吹けば飛ぶよ

うな小物でしかない。

しかし、あなたは好感を抱いていなかった。  
性格は傲慢そのもの。『格下』への見下しをまったく隠さない。

そして投稿する動画やトークのテーマといえ  
ば、歳上女性をいかに楽に落としたか／つかえ  
ないスタッフをどれくらい手ひどくボコボコし  
たか／現役アイドルを含む有名タレントの『抱  
き心地』がどうだったか、だ。なぜこんな最低  
なやつが中高生にウケているのかと、思わずい  
らだちを抱いてしまうほど酷い。

なによりあなたが苦手と思うのは、ある種の  
人間に共通して抱く、苦い劣等感のためだった。

ある種の人間というのは、つまり――

中学にいた、粗野で横暴で、あなたを面白半  
分でボコボコにして金を奪うような奴なのに、  
あなたが片思いする優しいあの子と付き合って  
いて、トイレでペニスをしゃぶらせていたヤン



キーとか。

大学にいた、あなたがデートに誘うか悩んでいた純朴なあの子を、会ったその日に酔わせて落として部屋に連れ込み、あっさり中出しをキメて自分の女にしてしまって、その上ハメ撮りまで残してしまう体育会系の先輩とか。

芸能界に無数に存在する、女性ととっかえひっかえやりまくって、節操も誠実さもカケラもないのに、なぜか女性ファンにはモテモテで、あなたのプロデュースする清純派アイドルたちですら、一生懸命グッズを集めていたりするような有名男性タレントとか。

そういう種類の人間のことである。

あなたは彼らが嫌いだ。そして間違いなく、○○はそういう種類の人間だった。

その上、あなたは成人男性で、○○は男子中＊生。あなたは彼の倍以上も生きているという

のに、顔も、トークも、収入も、名声も、もちろん女性経験も、すべてにおいて彼に敗北している。隣に立たれば、あなたの方が格下であると、誰であっても認めざるをえない。

だから、真面目に頑張ってきた自分こそ最後には成功するのだ、といった慰めは通じない。あなたが積み上げた時間は無駄なのだと、嫌でも意識させられてしまう。

でも——大丈夫。

円香は顔や収入なんかに流されない。

円香だって、ああいう人種は嫌いなはずだ。

確かに顔もトークも彼の方が圧倒的に上だけれど。

向こうは誰でも知ってるインフルエンサーで、俺の年収なんて秒で稼いでしまうけれど。

それでも円香は俺を選んで——

『えっ……えっ、ええ〜〜っ!?♥  
嘘っ……うそうそうそっ……!?♥  
ほっ、ほんとにい〜っ……!?♥』

え？

あれ？

『ほ、ほほ、本物おっ……!?↑♥  
り、リアルの〇〇クンっ……!?♥  
えっ……えええっ〜〜……!?♥』

黄色い悲鳴がモニタから響いた。

あなたは両目をこすり、まばたきをする。

しかし、現実是不変。モニタに映るのは、あなたの期待を裏切り、ファンの幻想を打ち砕く、ひどくみっともない円香の姿だった。頬を真っ赤に染めて、口元を両手で押さえ、喜びに目を見開き——指の隙間から覗いた口角は、

情けないほどつり上がっている。

まるで憧れのスターを前にした、ミーハー少女そのもの。司会が少年の経歴を説明している間も、髪をいじり裾をいじり、おかしいところないかな♥ 憧れの○○くんの前にいていいのかな♥ とばかりに、ちらちらと少年の顔をのぞき見る。

『あっ、あっあっ……♥ どうしよう私っ……えっ……やばっ、やばいっ……♥ ナマの○○クンやばっ……顔よすぎいっ……っ……♥』

円香のうわずった声をマイクが拾った。

信じがたい現実——信じたくない現実だった。

円香が、イケメンに夢中になっている。

生放送中であることも忘れているのだろうか。憧れのイケメンくんのにのぼせあがるあまり、進行にもまるでついていけない。

『——はは、そっすね。そんなノリで活動して

まーす。ま、円香さんはインフルエンサーとか興味ないみたいっすけど。だよね?♡』

『……。——……えっ! あっ、わ、私っ!?!』

髪や裾をいじり続けていた円香が、数秒遅れで会話に気づいて、素っ頓狂な声をあげる。

スタジオにどっと爆笑が巻き起こった。

司会やひな壇のタレントが一斉にツッコミを入れる中、円香は見たこともないくらい顔を紅潮させて、顔の前でぶんぶんと手を振っていた。

『あっあっ、アレはちがっ♡ 違いますっ♡  
キャラですっ♡ キャラづくりなのでっ!!  
むしろあのっ、わたしっ♡ ず〜っと〇〇クンのファンですッ……!!♡ さっ、サブチャンネルも登録してるしっ、メン限も入ってるしっ!!♡♡  
ぐっ、グッズもホント全部持っててっ……周年ライブもちゃんと行きましたッ……!! 〇〇クン大ッ……好きですッ!!♡♡♡』

円香が少年のリアクションも待たず、『喋るチャンスは今しかないっ♥』とばかりに、自分のことをまくしたてる。まさにイケメンくんへのファンムーブ。

それだけでもファンが幻滅するには十分だが、発言の内容は輪をかけてひどい。

アイドルは夢を見せる仕事。「キャラづくり」などと、冗談でも言っているいいことではない。

ましてや落とした金がイケメンくんの応援に使われているなど——女性やイケメンに小馬鹿にされながら安い賃金でせっせと働き、稼いだ月給をなすすべもなく円香に吸われ、そうして女性に縁もないまま円香のグラビアでシコり続けていくしかない非モテ童貞男性ファンからすれば、憤死ものの話である。

そんな負け犬たちの夢にトドメを刺すように、司会が言った。

——そうなんです！ 実は、円香ちゃんは〇〇くんの大ファン！ 円香ちゃん、憧れの〇〇くんに会えてよかったですね〜♥

司会の声とともに、スタジオのスクリーンが切り替わる。映し出されたのは、どこかのライブ会場で法被を着込んで、文字入りうちわを振る円香の姿だった。心底楽しそうに、屈託のない笑顔を浮かべている。法被もうちわも、むろん手作り。うちわに描かれた文字は——『〇〇クンの赤ちゃん産ませて〜!!♥』。

ファン自殺モノの写真を公開された円香は、口元をおさえて、身体をわななかせる。

『あっ……コ……コレはっ……あのっ……！』

『さっきスタッフさんから聞いたんですけど。いつも配信のたびに「〇〇クン応援し隊♥」って名前でスパチャ投げてくれるの、円香さんなんすよね？』

『エっ……!? あっ、なんでっ、知られっ……!?  
あっ……あああああ～っ……♡』

『円香ちゃんみたいな可愛い子が俺のファンっ  
て、マジめっちゃ嬉しいっすわ～』

『マっ、ママっ、まどかっ、ちゃっ……!?♡  
あう……♡♪ うえへ……うへ……っ……♡  
うえへっ……♡♡』

円香の顔が、ぷしゅ～っ♡と湯気を噴くようにのぼせた。りんごのように火照った顔を歓喜に緩ませ、無垢な少女のごとく頬に手を当てる。

少年が使ったのは、わざとらしく距離感を狭めることで、好感を持っていることを伝える話術だ。仕掛け側が格上で、仕掛けられる側が『私は格下♡』と自覚していないと使えないテクニックだが、円香には効果てきめんだった。あのプライドの高い円香が、自信が格下であると——好感を伝えられることすら僥倖と感じる



べき立場だと、そう自覚しているのだ。

やがてルール説明が終わると、司会は口説きタイムの開始を告げた。

相手役の少年は、気安い態度で円香に寄ると、あっさりとその手を握る。

『じゃ、とりあえずヤリ部屋——じゃないっすね(笑) 個室？ いきましょ？』

少年が口になっているのは、口説き用の個室のことだ。口説き難易度が下がるので、イケメン側はあの手この手で連れ込もうとするが、女性側も拒否することができる。

円香が少年のいちファンとして喜んでいるだけならば、応じるはずがない。少年の口説きに応じるつもりがないならば、ここで断るはずなのだ。

そのはず、なのに。

そのはずなのに、現実の円香は——

『~~~~っ……♡ うんっ♡♪』

幸せいっぱい満面の笑みを浮かべ、ふぬけた声で返事をしているのだ。

あなたのことも、ファンのことも、まったく気に留めていない。付き合いたての恋人のごとく五本の指を絡め合い、彼にぴったりと身をすり寄せている。

少年もまた、自然な手つきで円香の腰に手を回していた。あなたは円香の手を握ることすら躊躇していたのだが——あなたより遙かに年下の少年は、わずか数秒でそのハードルを乗り越え、慣れた手付きで円香を個室へエスコートしていく。

瞬間、円香と少年に、在りし日の記憶が重なった。

あなたからカツアゲした金を使って、あなたが片思いするあの子にコンドームをパシらせ、尻を揉み揉み多目的トイレへ消えていく不良の姿が——

あなたがゆっくり仲を深めて互いを知って、勇気を出してあの子を誘った飲み会で、顔を赤らめ俯くあの子の腰を抱き、ふたりきりで『次の場所』へと向かう体育会計の先輩の姿が——目の前の円香と少年に、重なる。

少年の手のひらは、それらの記憶と同じように、円香の腰より下へすべり落ちていった。

『あっ……♥ やっ、あっ……♥ お尻、揉んじゃっ——♥』

『あー、はいはい。俺の女なんだろ円香。黙ってケツ揉まれてろ？』

『っ……!!♥ はっ……はいっ……っ……♥』

少年の手でまくり上げられるスカート——タイツ越しの尻が丸見えになる。

少年は、円香の従順さを確かめるように、ぐにぐにと乱暴に尻をもみしだいた。指から尻肉があふれ、柔らかく形を変える。あなたのものだったはずの柔らかく張りのある尻肉が、いけすかない最低の少年の手で、好き放題に捏ねられていく。

目の前が赤く染まった。

なぜ。

なぜ、こんな最低なやつに。

なぜ、こんな誠実さのカケラもないやつらに。

なぜデレデレしているんだ。

なぜ怒らないんだ円香——!?

怒りにうめくが、控え室でいくらうめいても、スタジオの円香には届かない。

個室に入る直前、少年がニヤつきながら円香に耳打ちした。

円香は『ええ～っ……!?!♥ そんなこと言う

んですかぁ〜っ……!?!♥』と媚びた態度で甘えたあと——カメラの方へ振り返る。

へらりと笑った。

『そっ、それでは皆さんっ……♥ わっ、私はこれから、心ゆくまでイケメンさんとイチャついてくるのでっ……♥ ふっ、ふふっ……たっ、楽しんできま〜〜すっ……♥♥♪』

円香はそう言い残して、個室へと消えた。

乾いた笑いが漏れる。

よほど嬉しかったのだろう。円香の口の端から、よだれが垂れていた。

なぜ円香が少年に怒らないのか。

無論、その答えはあなたにもわかっていた。

少年があなたやオタクどもとは比較にならないほどの有名人で、トークがうまくて、金持ちで、女の扱いに慣れていて——

圧倒的にカッコいいだからだ。

※試読版はここまでとなります。

続きは製品版でお楽しみください。

## 樋口円香 vs イケメンくん

発行 : みぞほねのサークル

著者 : みぞほね

▶ pixiv : <https://www.pixiv.net/users/69536086>

▶ X Twitter : @MIZOHONE\_HD

イラスト制作 : 最奥が牛

▶ X Twitter : @SAIO\_GA\_USHI

※無断転載、複写、複製、配布などの行為を固く禁じます。